

な

ご

み

つ

う

し

ん

発行日：平成28年1月25日（第13号）

発行：島田療育センターはちおうじ

最後の生徒の作文は、「奇跡がくれた宝物」という題のきっかけになった作文です。誕生、出会いなど、幾つもの奇跡が重なり、「今」があるのですね。

所長 小沢 浩

母は、私が生まれたときの泣き声を聞いてうれしくなり涙が出たそうです。

それは、前に一度流産を経験していて、おなかにいる赤ちゃんが無事に生まれてくるかずっと不安だったから、生まれたときの声を聞いたらうれしくなって涙が出たと話してくれました。

その時は父も出産に立ち会い、母を励ましながら、「生まれてきてくれてありがとう」と、私の誕生を一緒に喜んでくれたそうです。

私は、こうして生まれた命を大切にしたいと思います。

(中学3年男子)

私が母のお腹の中にいたとき、何回も私が死んでしまいそうになり、母はその度入院をくり返し心配で気が気じゃなかったそうです。

その後、私は無事に生まれる事ができ、その時の体重がめずらしかったそうで、3333グラムだったそうです。その体重があまりにもめずらしかったので、今の私のラッキーナンバーは3です。

(中学3年男子)

私が生まれるときに、何時間かかったのかを聞きました。

すると、母は「48時間位だよ」と言いました。そして、私が母に、「なぜそんなに時間がかかったの」と聞くと、母は言いました。「難産で、普通は回りながら赤ちゃんは出てくるけど、回りながら出てこれなかったんだよ。だから、48時間もかかったの」と。

私はそのことを聞いた時、驚きました。そして、私は、母に、「辛くなかったの」と聞くと母は、「辛かったよ、陣痛弱かったし、2日もかかったから」と言いました。

私はその時、母はすごい人なんだと感じました。普段の母からはまったく想像できない苦勞をしている姿が脳裏に浮かぶと同時に、母に対して、尊敬の念を抱きました。

(中学3年男子)



私の生まれた時のことを話しはじめると、止まらない母に驚きました。いつもはめったに自分が生まれた時のことなど聞かないので、そのことを聞いて、自分が愛されているんだと改めて感じました。

(中学3年女子)

母は、足が悪く両方とも人工股関節です。そのため自然分娩では出産できなかったのですが、母の頑張りもあり、人工股関節で自然分娩は日本で初のことだったそうです。

母は私を命をかけて生んでくれました。この話を聞いて、やるべきことがあり、それに向かってこなすことが恩をかえすというにつながっていくと思います。

これからは母と父に感謝しながら生きていこうと思います。

(中学3年男子)



母は、私を無事に産むことができた達成感と私の泣き声をきいた時の安心感と喜びは、今でもはっきりと記憶に残っているそうです。父も母も生まれてから、赤ちゃんの部屋に寝かされている私をガラス越しに1日に何十枚も写真を撮ったそうです。

自分という存在をもっと大切にしたいなと思いました。

(中学3年女子)

生まれてきた時は泣かなかっただけだ。病院の人が私のおしりをバシバシたたいて無理矢理泣かしてくれただけだ。だがせめてバシバシがよかった。

(中学3年男子)

2人目の赤ちゃんを望んでいたお母さんは病気でお医者さんに無理だと言われていました。東京の病院に通いやっと授かった赤ちゃんが紗矢香です。出産までもトラブルの連続でした。妊娠10ヶ月の時に腎炎になり、高熱で入院、お腹の子は大丈夫か不安で、どうかお腹の子は助けて下さいと祈り続けました。出産のときには、破水してしまい、無事に生まれるか本当に心配しました。いろいろな事を乗り越えての出産だったので、本当に無事に生まれてくれてありがとうと心の底から感謝しました。

産婦人科の先生が、妊娠して無事出産するのがあたり前のように思われがちだが、無事に生まれてくると言うのは、それは奇跡なんだと話してくださいました。だから、あなた達が生きていると言う事は、たくさんの奇跡が与えてくれたかけがえのない宝物なのです。その尊い命を大切にしてください。

(中学3年女子)

(奇跡がくれた宝物 小沢浩著
クリエイツかもがわ より)

